

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380672

研究課題名(和文) トランスナショナルな移動経験を通じた日比ダブルの若者のアイデンティティ構築

研究課題名(英文) Identity construction of Japanese Filipino Youth who have experienced the transnational mobility

研究代表者

小ヶ谷 千穂 (OGAYA, CHIHO)

フェリス女学院大学・文学部・教授

研究者番号：00401688

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、成育期における日比間のトランスナショナルな移動経験を通して、「日比ダブル」の若者がどのようなアイデンティティ構築過程を経験するのかを、現在20代前半となった彼ら・彼女らの語りから実証的に明らかにすることを目的とした。特に「ルーツ」と「ルート」の概念にそれぞれ着目してインタビュー調査の結果を分析した結果、日本育ちおよびフィリピン育ちそれぞれの日比ダブルの若者にとって、「ルーツ」をめぐる学校や支援組織など家庭「外」での経験が、「ルート」として彼らのアイデンティティの形成に大きくかかわっていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to explore the process of identity construction of Japanese Filipino Youth who have experienced the transnational mobility while they have grown up. Semi-structured interviews were conducted for the Japanese Filipino Youth who are in their 20's both in Japan and the Philippines. Based on the interviews, the idea of "roots" and "routes" were applied to analyse their experiences and it was explored that either in the Philippines or in Japan, their experience regarding their "roots", outside of their own family, such as at school and/or at the support organization, have significant impacts on their identity construction process. This process itself has created their "routes" to be adults.

研究分野：国際社会学

キーワード：日比ダブル ルート アイデンティティ トランスナショナルな移動経験 若者 語り

1. 研究開始当初の背景

今日、中国、韓国・朝鮮に次ぐ外国籍人口の第3位を占める約20万人の在日フィリピン人は、日本社会における重要な移民集団である。在日フィリピン人の特徴は、女性比率が高いこと、および日本人とのいわゆる国際結婚を契機とする日本への定住化傾向が大きいことにある。[1]またそれに伴って、現在約10万人のフィリピン人の母親から生まれた子どもが日本国内で生活していると推計され[2]、重要な子ども・若者集団ともなっている。他方でフィリピンにおいても、多くが国際婚外子として生まれる「日比国際児(Japanese Filipino Children: JFC)」の数は数万人にのぼると言われ、その権利状況をめぐる議論が積み重ねられてきた。研究代表者は主に在留資格「興行」で入国したフィリピン人女性エンターティナーを母親とする在比および在日の日比国際児に関して、従来多かった「子どもの権利」アプローチを越えて、国際社会学の視点からの実証的な「日比国際児研究」を過去6年間にわたって実施してきた(若手研究(B)H23-H25年度「トランスナショナルに構築される「日比国際児」のアイデンティティとキャリア・プラン」(研究代表者・小ヶ谷千穂) 若手研究(B)H20-H22年度「日比国際児のアイデンティティ構築に関する日比比較研究～支援組織の役割に着目して」(研究代表者・小ヶ谷千穂))。これらの研究からは以下のような知見が得られた。研究課題からは、支援組織にかかわってきた子どもの経験から、出自としての「日比国際児」「日比ダブル」という条件に加えて、そこから派生した日比間でのトランスナショナルな移動の経験と日比の市民社会との接触の経験が、むしろ「日比国際児」というアイデンティティを新たに作り上げていることが明らかになった。また研究課題からは上記のようなトランスナショナルな移動経験が、若者たちがキャリア・プランを構築する上でも重要な役割を果たしていることがわかった。

同時に、日本在住の日比国際児に関する研究[3]や、研究代表者自身がこれまでの研究過程や教育活動の中で出会ってきた事例から、日本生まれあるいは日本に呼び寄せられた日比ダブルの若者の多くも、成育の過程で数週間から数か月の比較的短期のものから数年におよぶ比較的長期のものまで、フィリピンでの滞在歴を持っていることがわかってきた。すなわち、成育期において日比間の往復移動の経験を持つ子どもが、日比国際児においてはきわめて多いことが見受けられる。これは、研究代表者がこれまで主として研究してきた在比の日比国際児と同様もしくはそれ以上に、日本生まれの日比国際児が、「ダブル」あるいは「ハーフ」といったアイデンティティを構築する際に、日比間のトランスナショナルな移動経験が重要な要素になっている可能性を示唆している。

トランスナショナルな移動経験が若者のアイデンティティの構築にどのように影響するか、という研究視点は、研究代表者がやはり過去5年間実施してきたカナダ・トロント在住のフィリピン系1.5世代移民の研究によって導かれた(基盤研究(B)海外学術H24-H26年度「フィリピン系移民第1.5世代による社会生活の構築に関する比較研究」(研究代表者:長坂格・広島大学))および(基盤研究(B)海外学術H21-H23年度「移民第1.5世代の子ども達の適応過程に関する国際比較」(研究代表者:長坂格・広島大学))。大人の労働移動とは異なる子ども・若者の移動経験への着目は、世界的にも移民研究における重要な論点となっており、本研究はこうした最先端の移民研究の関心にも連なるものである。以上の学術的背景・研究代表者のこれまでの研究との関連において、本研究は、現在主として生活基盤を日本に置く20代前半の「日比ダブル」の若者を研究対象として、彼らの「ダブル」としてのアイデンティティ構築過程と、そこにおけるトランスナショナルな移動経験との相関について、当事者の語りから明らかにしていくものである。

また、研究代表者はこれまで「日比国際児(Japanese Filipino Children; JFC)」という名称を研究上の分析概念として用いてきたが、上記研究を遂行していく中で、「国際児」あるいは「JFC」という概念および呼称の限界も明らかになっており、日本社会およびフィリピン社会においても広く使用されかつ当事者による自己認識上でも重要な「ダブル(あるいはハーフ)」という語を用いたほうが、こうした若者たちのアイデンティティ構築をトランスナショナルな水準で考察する上で有効であるとの結論に達した。そこで本研究では、「日比ダブル」という呼称および概念を用いることにした。またこれによって、「日本 フィリピン」の組み合わせに限らず、広く他の国籍・エスニシティ間に生を受けた子ども・若者研究への応用・比較研究が可能になり、広く日本社会における「ダブル」の子ども・若者研究に寄与することも可能になると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、成育期における日比間のトランスナショナルな移動経験を通して、「日比ダブル」の若者がどのようなアイデンティティ構築過程を経験するのかを、現在20代前半となった彼ら・彼女らの語りから実証的に明らかにすることを目的とした。単に両親がそれぞれ異なる文化/エスニシティ/国籍を持つ、という意味での「ダブル」であるという点だけでなく、彼ら自身が出生から今日にいたるまで複数の国際移動経験を持つ「移動する子ども」であるという事実を重視し、「ダブルの子ども」と「移動する子ども」の交差する地点から、国際社会学における「子ども」

「若者」研究の刷新を目指した。

本研究は以下の問いに答えることを具体的な目標とした。

(1) 成育期におけるフィリピンと日本とのトランスナショナルな移動経験およびその内容(経験自体の有無・期間・深さの度合い)は、日本に生活基盤を置く若者の「ダブル」としてのアイデンティティ構築にどのように影響しているのか。

(2) また、上記のようなトランスナショナルな移動経験の内実そのものが、フィリピンおよび日本における彼らの家族の社会階層や生活状況とどのように関連しているのか。

(1)(2)の問いを当事者の語りから詳細に明らかにし、質的実証研究として国際社会学における新たな「子ども」「若者」研究の基盤とすることを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、具体的に以下のような調査および文献研究を実施した。

(1) 主たる生活基盤を日本におく20代前半の日比ダブルの若者の、トランスナショナルな移動経験と、「ダブル」アイデンティティ構築に関するインタビュー調査

(2) 主たる生活基盤をフィリピンにおく20代前半の日比ダブルの若者の、トランスナショナルな移動経験と、「ダブル」アイデンティティ構築に関するインタビュー調査

(3) 文献調査による、「ダブル」アイデンティティの理論的検討

(1)(2)の調査における研究対象が20代前半であることは、1990年代前半～中ごろ生まれであり、母親世代のフィリピン人女性エンターティナーの来日件数のピーク期の1つであるため日比ダブルの若者としての代表性が高いこと、当事者の語りを主たる材料とする本研究において、自らの成育歴を回顧的に自らの言葉で語れる年齢層として最適であること、また大学在学中もしくは就労開始初期ということで、自らのアイデンティティについて日常的に思索する傾向が強い年代であること、を理由としている。なお、(1)(2)の調査においては、可能な限り同一人物への複数回調査を実施し、二回目以降は前回インタビュー時のテープ起こし記録を調査対象者とともに検討しながら話を進め、調査に対する調査対象者からのフィードバックを積極的に受け入れる、一種のアクション・リサーチの手法を用いた。こうした手法を採ることによって、調査者が調査対象者から情報収集するという一方的な関係から、双方向的でかつ良好な「調査者 被調査者」関係を構築することが可能となり、調査研究の質的水準も高めることができるとともに、調査対象者自身の将来設計等に本研究が有機的に助言することができると考えたからである。なお、インタビューは対象者の言語状況に応じて、日本語、フィリピン語、英語の三言語を組み合わせて使用した。

また本研究においては、調査者と調査対象者との信頼関係がきわめて重要になる。そのため、具体的な調査対象者は、すでに過去の研究過程において研究代表者とのラポールが形成されている個人、およびその個人からの紹介によるスノーボール・サンプリングを用いて決定した。

最終年度(平成28年度)には、(2)の対象者および関係者を日本に招聘し、日本の大学生との交流活動などを通して、自らのアイデンティティについて語る場面を設定し、広く本研究の研究成果の開示の場とすると同時に、調査対象者にとっても自己表現の場とすることができた。

4. 研究成果

本研究の成果については、まず、(1)調査方法そのものにおける成果と、(2)日比ダブルの若者の「アイデンティティ構築」を考察する上での「ルーツ」と「ルート」概念の再検討という大きく分けて2つの成果を得ることができた。また、本研究の成果と課題を踏まえて、(3)新たな研究課題を設定することができた。

(1) 複数調査対象者による生成的インタビュー方法の意義

非構造化インタビューによる日比ダブルの若者の「語り」を分析することに主眼を置いた本研究においては、当初の計画どおり、同一人物に複数回インタビューを行うことで、インタビューを経て生じた当事者の心境の変化などを二度目のインタビューで話題する、という手法も採用することができた。合わせて、研究代表者との1対1の面接方式ではなく、フォーカス・グループ・ディスカッションに近い形で、研究代表者と複数の調査対象者(各回2名ずつ)での会話そのものを「語り」として採録するという調査方法を用いたことよって、より「アイデンティティ構築」にかかわるダイナミックなプロセスを、調査の現場においても観察することが可能となった。ライフ・ストーリー・インタビューにおいてはこれまで「調査者と被調査者との相互作用としてのインタビュー」[4]という発想が重視されてきた。今回本研究においては、ライフ・ストーリー・インタビューと、フォーカス・グループ・ディスカッションの手法を組み合わせることで、調査対象者がライフ・ストーリーを「語る」場面そのものにおいて、同じ「ルーツ」をもつ日比ダブルの若者同士が、それぞれの経験を相互参照し合う条件を作り出すことができた。それによって、「アイデンティティ構築」の動的な性質を、いわば「疑似体験」することがインタビューの場においても可能となり、そのことが調査対象にとっては新たな「発見」として認識される場合もあった。

本研究におけるインタビュー調査そのものが、日比ダブルの若者たちの「アイデンテ

ィティ構築」それ自体のプロセスにコミットしていき、という点の功罪については今後さらに検討しなければならないが、少なくとも、インタビュー調査が調査対象者との相互作用である、ということを経験的にとらえた上で研究を実施する、という新たな調査方法を具体的に獲得できたことは、研究代表者にとっては大きな収穫となった。

(2) 日比ダブルの若者の「アイデンティティ構築」を考察する上での「ルーツ」と「ルート」概念の再検討

本研究においては、「ダブル」アイデンティティの構築過程への着目を、「ルーツ」と「ルート」という概念を用いて再構成し、その「ルーツ」と「ルート」とが、日本育ちの日比ダブルの若者たちにどのように認識され、どのように彼らの日常に介入しているのか、という観点から分析を行った。そこで得られた知見は以下の通りである。彼らが、自分自身とほかの子どもたちとの差異に気づいた契機は「学校」という場を通してであったこと。しかし、それは必ずしも「差別された」という体験ではなく、「自らのルーツに対して大人が過剰に反応する」という事実の体験でもあること。インタビューの中で、「ダブル」の若者たちがお互いの中にそれぞれ「フィリピン人らしさ」を見出そうとしたり、それを確認し合ったり、時にはそれを拒否するようなやりとりが見られたこと。きわめて近い境遇の彼らの間にあっても、「ルーツ」にもとづく多様な経験には、広がりが見られたこと。それを必ずしも「フィリピンの要素が強い」と言わなくとも、フィリピン側の親族と彼らの生活とは密接に結びついていること。自らが「ダブル」あるいは「ハーフ」である、という認識は成人後の現時点で、日比双方の文化の「バランス」としての役割、として認識される側面がある。

その役割の認識は、フィリピンの親戚訪問や、フィリピン人母の友人たちの交流や日常的な相互関係の中で本人たちに経験・認識されていく「自分の中のフィリピン人っぽさ」に裏打ちされている。

すなわち、彼らの成育してきた「ルート」そのものが、学校での大人からの過度な干渉や同級生からのまなざし、母親や親族との関係、といった、「ルーツ」をめぐる多様でかつトランスナショナルな経験によって形成されていたのだ。ゆえに、「ルーツ」そのものもまた静的なものではなく、「ルート」の中で再帰的に認識され本人の内部において構築されていくものだと言えるだろう。だからこそ、表面的な「ルーツ」（ここでは、日比ダブルであること）自体が彼らを結び付けているわけではなく、むしろその経験が多様である中で、今回の調査対象者のように、相互作用を通じて「獲得」されていくアイデンティティ、として「ルーツ」

をとらえることができる、という点が確認された。

(3) 「ルート」のさらなる比較研究に向けて

以上のような知見を踏まえて、本研究期間においては、他大学での関連する研究会やワークショップに参加する機会も多く、そこで「移動する子ども・若者」および「ミックス・ルーツや多文化家族の中で育つ子ども・若者」という観点から国内外の多くの研究者と意見交換を行うことができた。

そうした意見交換や他の研究成果の知見から学ぶ中で、またフィリピンより招聘したフィリピンで生育した日比ダブルの若者へのインタビューおよびフィードバックを通して、「ルーツ」と「ルート」という2つのキーワードの相互関係について、理論的かつ実証的にさらなる考察を進める必要を痛感するに至った。

こうした研究成果を踏まえて、あらためて日比ダブルの若者たちの成育「ルート」とアイデンティティの関係について、歴史的経緯を含めた時間軸を重視した研究を行う必要性および重要性を確認したことで、H29年度新規採択の基盤研究(B)「日比間の人の移動における支援組織の役割～移住女性とJFCの経験に着目して」を発案・計画につなげることができた。

<引用文献>

- [1] 高畑幸「在日フィリピン人介護者 一足先にやってきた『外国人介護労働者』」『現代思想』Vol. 37-2。2009年。
- [2] 鈴木健 2010「在日フィリピン人:時代によって顔を変えていくその姿」『M-net』No. 133。2010年。
- [3] 原めぐみ「越境する若者たち、望郷する若者たち 新日系フィリピン人の生活史からの考察」大阪大学大学院人間科学研究科『グローバル人間学紀要』第4号。2011年。
- [4] 桜井厚・小林多寿子ライフ・ヒストリー・インタビュー』せりか書房。2005年。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

小ヶ谷千穂「日比ダブルの若者が語る家族とアイデンティティ(1)～日本育ちの若者の語りから」『フェリス学院大学文学部紀要』5号。2016年。11-27頁。(査読無)

小ヶ谷千穂「<移住家事労働者>という存在を考える 「個人的なことはグローバルである」時代において」『理論と動態』第9号。2016年。2-19頁。(査読有)

OGAYA, Chiho, "Book Review: Asian Women and Intimate Work, (edited by Ochiai Emiko and Aoyama Kaoru. Brill, 2014)" in *International Journal of Japanese Sociology*, No.25, 2016, pp.164-165. (依頼原稿)

小ヶ谷千穂「書評：Kyoko Shinozaki 著 Migrant Citizenship from Below: Family, Domestic Work, and Social Activism in Irregular Migration」お茶の水女子大学ジェンダー研究所『ジェンダー研究』第19号。2016年。213-215頁。(依頼原稿)

小ヶ谷千穂「書評：佐伯芳子著『移住女性と人権 社会学的視座から』』『女性労働研究』60号。2016年。186 - 189頁。(依頼原稿)

小ヶ谷千穂「書評：マーサ・ヌスパウム (小沢自然・小野正嗣訳)『経済成長がすべてか？～デモクラシーが人文学を必要とする理由』』『常盤台人間文化論叢』第1号。2015年。113-115頁。(査読無)

〔学会発表〕(計1件)

OGAYA, Chiho, "Filipino Roots Children and the Culture of Japanese School and Supporters" 北海道大学サマインスティテュート・オープンセミナーワークショップ「移民者たちの生活世界」2016年7月23日。北海道大学教育学研究院。(招待講演)

〔図書〕(計6件)

小ヶ谷千穂「フィリピン人の子どもたち」荒牧重人・榎井縁・江原裕美・小島祥美・志水宏吉・南野奈津子・宮島喬・山野良一編『外国人の子ども白書 権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から』明石書店。2017年。33 - 34頁。

小ヶ谷千穂「フィリピンの海外雇用政策の推移と新しい課題～政策の長期化がもたらしたものは」宇佐美耕一・小谷眞男・後藤玲子・原島博編『世界の社会福祉年間2016』2016年。旬報社。85-102頁。

小ヶ谷千穂『移動を生きる：フィリピン移住女性と複数のモビリティ』2016年。有信堂高文社。総頁数261。

宮島喬・佐藤成基・小ヶ谷千穂編『国際社会学』2015年。有斐閣。総頁数241。

小ヶ谷千穂「開発と海外出稼ぎの複雑な関係」佐藤寛・浜本篤史・佐野麻由子・滝村卓司編著『開発社会学を学ぶための

60冊』2015年。明石書店。181 - 182頁。

OGAYA, Chiho, "When Mobile Motherhoods and Mobile Childhoods Converge: The Case of Filipino Youth and Their Transmigrant Mothers in Toronto, Canada" in Nagasaka Itaru and Asuncion Fresnoza-Flot eds., *Mobile Childhoods in Filipino Transnational Families: Migrant Children with Similar Roots in Different Routes*, 2015, Palgrave Macmillan. pp.205-221.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小ヶ谷千穂 (OGAYA CHIHO)

フェリス学院大学・文学部・教授

研究者番号：00401688